

時記せる處なるが、畫伯の筆が社會に迎へられしは、其落葉以來の事にして、其の以前にも賢首菩薩其の他傑作尠からざりしも、病身なりし上に多年眼病を患ひたれば、筆執る事も多からず、且つ亂作を避け、如何なる小品と雖も之れを研究的に物されしかば、他の畫家に比して作品少く、従つて遺産とてもなく、遺子の教育も充分ならざるより、今回岡倉覺三、玉堂、大觀、廣業、觀山、臨風の諸氏等發起となり、來四月二日より向ふ一週間、本校構内に於て追悼展覽會を開催して遺墨を陳列し、且つ有志より寄贈の金屏風五双に現代諸大家揮毫し、其他各畫家の寄附畫をも賣却し、出陳の遺墨を寫眞版となして一部の畫帖となし、之れを有志に頒ち、其の上り高を以て遺子の教育費に充つる筈なりと。今の世に於て此の美學を見る、洵に喜ばしき事なり。而して遺墨展覽會事務所は本校文庫内に設けられ、出陳せんとする向は二月中に申出づべき定めなりといふ。

(同第十卷第五号)

外に同誌第十卷第八号(同年五月)には前出「なにはばら」の本展覽會に関する論評も掲載されている。岡倉覺三らが発行した『春草画集』によれば、本校は「魚類」(写生成績)、「寡婦と孤児」(卒業制作)および「水鏡」を出品したことがわかる。

#### ⑦ 青木繁遺作展覽會

明治四十五年三月十五日より同月三十一日まで上野公園竹之台陳列館で美術新報主催第三回美術展覽會が開催され、会場の一隅に青

木繁の遺作五十一点が陳列された。

青木は明治三十七年本校西洋画科卒業。在学中、三十六年九月開催の白馬會第八回展に「黄泉比良坂」(東京芸術大学蔵)ほか十数点を出品し、その神話などに題材をとった独自の浪漫主義的作風は画界に大きな波紋を投げかけ、白馬賞第一回受賞者となった。卒業した年の秋には「海の幸」を白馬會第九回展に出品。明治四十年の東京勸業博覧會には「わだつみのいろこの宮」を出品したが、同年夏には郷里久留米に帰り、貧窮と落魄の放浪生活の中で四十四年三月二十五日、数え三十歳の若さで病死した。遺作展はその一周忌にあたって友人たちが開催したもので、出陳作は大正二年政教社発行『青木繁画集』に多少作品を追加して収められた。同書はほかに青木の歌稿、書簡、画談および友人たちによる「追悼と感想」(坂本繁二郎、森田恒友、高村真夫、正宗得三郎、有島生馬、木下柰太郎、岩野泡鳴、蒲原有明、梅野満雄)、年譜が収録されており、青木繁研究に不可欠の資料となっている。

青木繁が日本近代絵画史上に輝かしい地位を占めるのはずっと後になってからである。死去および遺作展開催の際には友人たちの書いたものが新聞や雑誌に載ったが、世間一般の評価は決して高いとは言えなかった。本校の校友会月報などは、その死去に際してわずか数行の記事を載せただけで、遺作展については全くノーマコメントであって、その扱いは前記菱田春草の場合と極めて対照的であった。

#### ⑧ 高勾麗時代古噴の壁画模写

本校図案科建築学授業嘱託関野貞（東京帝国大学工科大学助教、造神宮技師、古社寺保存会委員）は明治四十二年八月より韓国度支部、次いで朝鮮総督府に命ぜられて朝鮮半島の古蹟調査に従事していた。一方、これより先き、本校日本画撰科生太田福蔵（天送）は明治三十八年満州に出征。のちに朝鮮守備隊に編入され江西に滞在したが、その折りに平安南道江西郡遇賢里に三つの古墳があることを聞き、同朋兵士や地元民（学校生徒）の協力を得て発掘を試み、同年十一月二十八日にそのうちの最大の古墳に見事な壁画があるのを発見した。太田はそれらをスケッチして発掘した穴を塞いでおいて帰国し、母校で学業を再開した。そして、たまたま関野貞の講義で朝鮮美術の話の聴き、関野にスケッチを見せて説明したところ、早速調査しようということになり、大正元年秋に関野は李王職博物館と交渉して本校を卒業した太田と当時本校助手であった小場恒吉を同伴して発掘、模写を行なった。三つの古墳は高勾麗時代（C.三七〜D.六六八）のもので、大、中、小とあり、大、中の古墳には四神、天女、仙人、唐草や蓮花の模様等が描かれていた。また、ここから三里ばかり東南の鶴林面肝城里にも二つの玄室を持ち壁画のある大古墳があったので、太田と小場は分担して二ヶ月余りかけてそれらの壁画を模写し、李王家の博物館に提出した。さらに、平壤の西南の鎮南浦府大上面梅山里にも壁画古墳があるという通報を受け、太田がそこへ赴いて騎馬人物、狩猟図、四神、模様等をスケッチした（大正二年二月発行『美術新報』第十二巻第四号に関野、太田による報告と模写の写真が掲載されている）。

関野は大正二年に梅山里の古墳を調査した。そこには十ばかり古

墳があり、その中の一つに四神、人物、騎馬像、狩猟図、雲形や唐草の模様が描かれており、関野はこれを千五百年前頃のものとして推定し、狩塚と命名した。また、その西北の新北面花上里にも十数個の古墳があり、そのうちの二つに壁画があった。南方のものには神像や人物男女、模様、柱や組物の絵が描かれており、関野はこれを千四百年前の古墳と推定し大蓮華塚と命名。また、北端のものには人物、蓮華模様、星形や唐草の模様が描かれており、これについては千四百年前頃と推定し、星塚と命名した。さらに、鎮南浦平壤間鉄道線路の真池洞駅附近にも二つの壁画古墳があり、大きい方には組物その他の模様や楼閣が描かれており、これには大塚と名付けた。小さい方は柱頭と礎盤を有する八角柱といい、牛車、騎馬像、男女人物、四神、唐草や蓮花の模様、山水、樹木、狩猟等々の壁画といい、大変優秀なもので、これについては千四百年前のもので推定し双楹塚と命名した（大正三年三月発行『美術新報』第十三巻第五号に関野貞の報告と壁画の写真、太田福蔵による双楹塚壁画模写の写真が掲載されている）。

本学芸術資料館には双楹塚壁画模写の一部（十六点）が収蔵されている。いずれも大正四年十一月九日に小場恒吉より買入・納入したものである。小場は東京美術学校と東京帝国大学の命令で模写に従事した。その履歴書（本学蔵）には大正元年九月十二日（東京美術学校命令。六十日間。延長三週間）、同二年七月三十一日（帝国大学命令）、同三年（東京美術学校命令。九十日間）と三回に亘って模写したことが記されている。

なお、関野貞らの朝鮮古蹟調査の成果は大正四年朝鮮総督府発行

『朝鮮古蹟図譜』全十五冊において紹介されている。

### ⑨ 林美雲死去

明治四十五年七月二十九日、本校彫刻科助教林美雲が肋膜炎により死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄に略歴紹介と追悼の記事が、また同第三号に肖像の写真が掲載されている。美雲は文久二年江戸浅草生まれ。旧名西牧正八。高村東雲、光雲に師事し、明治二十四年本校雇となり、同二十八年から三十年まで京都市美術工芸学校に勤務。三十一年本校助教となり光雲のもとで木彫の指導にあたっていた。

### ⑩ 狩野友信死去

明治四十五年七月十五日、本校創立に尽くし、本校絵画科助教をつとめた狩野友信が中風症により死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄にその経歴紹介と追悼の記事が掲載されている。なお、同誌第十巻第九号によれば、同年六月二日、知己門人二百余名が巣鴨町妙義坂上の丹波（敬三）葉学博士宅で友信の古稀祝賀会を開いたばかりであった。遺骸は染井墓地に葬られたが、大正三年三月一日に至り知己や教え子たちによって狩野家歴代の墓所である池上本門寺に墓碑が建てられた。表面の字は今泉雄作の書により、裏面は正木直彦撰文、屋代晁江書により高仙鶴が刻んだ（『故狩野友信先生墓碑建立報告』大正三年三月）。

### ⑪ 西郷孤月死去

大正元年八月三十一日、もと本校絵画科助教であった西郷孤月が死去した。『東京美術学校校友会月報』第十一巻第一号訃音欄に略歴の紹介と追悼の記事が掲載されている。孤月は明治三十一年日本美術院創立に加わり、雅邦の娘と結婚（翌年頃離婚）したが、同三十六年頃から放浪生活に入り、大正元年台北滞在中に発病し東京に帰って死去した。四十歳であった。近年、郷里の長野県下を中心に遺作の発掘が進み、展覧会が開かれるなど、再評価の試みがなされ、それらを集約したかたちで昭和五十八年に山川武・菱田春夫編『西郷孤月画集』が信濃毎日新聞社により発行された。

### ⑫ ラグーン採用の可否

大正元年十一月三十日、文部省大臣官房秘書課長心得瀬戸虎記より正木直彦校長に対してヴィンツェンツォ・ラグーン採用の可否について照会があった。本書第一巻で触れたように、ラグーンは明治九年から同十五年まで工部美術学校彫刻科教師をつとめた後、清原玉らを伴ってイタリアに帰り、パレルモ市に工芸学校を開設して校長となった。同校は間もなく市立高等美術工芸学校に昇格。清原玉は同地で正式に西洋画法を学び、同校の油絵教授となり、画家として名声を得た。明治二十二年にはラグーンと結婚し、エレオノラと改名している。帰国後三十年たち、ラグーン夫妻の日本への想いは止みがたく、大正元年九月二十七日、ラグーンは日伊両外務省を介して日本政府に再雇用を嘆願した。そのために本校に採用の可否が問われたのである。これに対して本校は「経費ノ都合上採用ノ見込無之候」と回答し、本件についてはこれで結着がつかずしてしまっ